

厚生労働科学研究費補助金（がん対策総合研究事業）  
（分担研究報告書）

障害者福祉専門職からみた障害者の受診時の困難に関する研究

研究分担者	飛松 好子	国立障害者リハビリテーションセンター	総長
研究協力者	緒方 徹	同 病院	障害者健康増進・運動医科学支援センター長
研究協力者	樋口 幸治	同 病院	健康増進・運動医科学支援センター・運動療法士長
研究協力者	清野 絵	同 研究所	室長
研究協力者	今橋 久美子	同 研究所	主任研究官

研究要旨

障害のある人が、がんなど、障害の原疾患以外の重篤な疾病による医療機関の受診にあたり、適切な対応を受けられるよう、受診時の困難や好ましい対応の事例を収集することを目的として、専門職 15 名を対象にインタビューを行った。困難な点は、医療接遇に関するものと設備環境に関するものに大別された。がんに関連する受診支援を経験した人はいなかったが、医療機関の受診においては、適切な配慮を必ずしも十分に受けていないことが明らかとなった。

A. 研究目的

障害のある人の医療へのアクセスが阻害されているという指摘は先進国においてもしばしば指摘されている。一方、日本においては 2016 年に障害者差別解消法が施行されてからも、医療機関では十分な対応マニュアル等が準備されているとは言い難い状況が続いており、医療現場での適切な対応を促すための医療者向けの情報が必要な段階にある。

障害のある人が、がんなど、障害の原疾患以外の重篤な疾病による医療機関の受診にあたり、適切な対応を受けられるよう、障害のある人の受診時の困難や好ましい対応の事例を収集する。

B. 研究方法

国立障害者リハビリテーションセンター病院（健康増進・運動医科学支援センター）または自立支援局において障害者支援を行う専門職（看護・福祉）を対象とした。

研究者から研究についての意図と内容について説明し、同意の得られた協力者に研究者が個人インタビューまたはグループインタビューを行った。インタビュー時間は 1 時間程度とし、下記の 5 つの質問を中心とした。

1. これまでどのような障害のある方の支援に関わってきましたか。
2. 医療機関の受診への付き添いや、受診のための調整をした中で、困ったり、大変だった経験はありますか。それはどのようなことでしたか。
3. 医療機関の受診において好ましい対応だったと思う経験はありますか。それはどのようなことでしたか。
4. 検診や障害の原疾患以外の重篤な疾患やケガ等についての受診について知っていることがあれば、教えてください。
5. そのほか、障害のある人が適切に医療を受けるという点から見て課題だと思うことはありますか。

協力者の同意を得た上で録音し、逐語録を作成し、データを電子化した。

C. 研究結果

専門職（相談支援、生活支援、就労支援、健康管理等に従事する社会福祉士、作業療法士、看護師等）15 名が参加した。各質問への回答の抜粋を下記に示した。

1. これまでどのような障害のある方の支援に関わってきましたか。

- ・肢体不自由
- ・視覚障害
- ・聴覚障害
- ・高次脳機能障害
- ・発達障害
- ・知的障害＋身体障害＋精神障害
- ・その他上記の重複など

2. 医療機関の受診への付き添いや、受診のための調整をした中で、困ったり、大変だった経験はありますか。それはどのようなことでしたか。

【肢体不自由】

- ・キャスター付きの椅子に「おかけください」と言われた。片麻痺で、座る前に椅子が転がってしまうので危なかった。
- ・脊髄損傷で車椅子を使用しているのに「1 日 8000 歩以上、歩きましょう」と言われた。

【視覚障害】

- ・「このように」「あちらへ」など指示代名詞で説明された。
- ・受診受付や会計などのタッチパネルは、音声ガイドがあってもお手上げだった。
- ・眼科以外の科に入院した。視力が残っている場合でも、行動範囲を制限された。

【聴覚障害】

- ・声だけで名前を呼ばれて気づかなかった。順番を最後に回され、検査時間が終わってしまった。
- ・「先生が筆談に使ったメモをください」と言ったら、目の前で破り捨てられた。

【高次脳機能障害】

・十分受け答えができるのに、本人でなく付き添い者にだけ話をしようとする。

【発達障害+知的障害】

・長時間待合室にいと、大声を出したり、外に飛び出したりするので、支援者2人以上の態勢が必要。1人が待合室で順番を待ち、もう1人は駐車場の車の中で患者さんと待つ。

3. 医療機関の受診において好ましい対応だったと思う経験はありますか。それはどのようなことでしたか。

・病院にボランティアがいて、受付から会計まで介助してくれた。

・診察室へ入るときに、ドアを開けて「お待たせしました、どうぞ」と迎え入れてくれた。

・診察内容を紙に書き、渡してくれた。

・カードやボードで指示を作り、技師が示しながら検査を行った。

・受付、外来、会計まで、引き継ぎがうまくされており、スムーズに受診を終えられた。

・各部署から出向いて検査してくれたので、移動せずに済んだ。

4. 検診や障害の原疾患以外の重篤な疾患やケガ等についての受診について知っていることがあれば、教えてください。

・年2回支援施設の併設病院で集団検診がある。検査の流れが決まっていて、必要に応じて職員がついて案内する。

・「人間ドッグを受けたいが、流れ作業についていけないし、全介助が必要になり申し訳ない」と本人が言う。

・手術について本人が決めなければいけないときに「御家族を呼んでください」と言われる。まず家族の判断ありき。

・主治医が聴覚障害者の手術（虫垂炎）への立ち会いを認めてくれたので、患者さんに手話通訳できた。

5. そのほか、障害のある人が適切に医療を受けるという点から見て課題だと思うことはありますか。

・障害の有無によらず、受診順番を音声、振動、点滅表示等で知らせる端末やアプリケーションが普及するとよい。

・駐車場、出入り口、通路、引き戸、回転ドア、タッチセンサー、自動受付・会計機械など、段差以外にも、移動や利用が困難な場面が多い。

・本人が希望する配慮を説明できる簡単なツールがあるとよい。

（細かい文章で大量に書いてあってもすぐに読めない）

・医療従事者がすべての障害特性を知ることは難し

いが、「困ることはありますか。どうしたらよいですか。」と確認する姿勢があれば適切な対応が可能ではないか。

・障害の状況・程度は人による。受療においても、個別の環境調整次第で本人ができることをもっと活かせるのではないか。

D. 考察

本研究では、障害者の受診時の困難について、支援経験のある専門職にインタビューを行い、現状と課題を明らかにした。がんに関連する受診支援を経験した人はいなかったが、医療機関受診においては、適切な配慮を必ずしも十分に受けていないことが明らかとなった。

困難な点は、医療接遇に関するものと設備環境に関するものに大別され、前者の例としては「説明や意思確認が、本人ではなく付き添いや支援者に向けてなされることがある」、後者の例としては「視覚障害があると、受診受付や会計などのタッチパネルは、音声ガイドがあってもお手上げである」などが挙げられる。

今後、逐語録をテキストデータに変換し、カテゴリ生成やテキストマイニング等の手法を用いて、障害特性に関連した課題や障害種別を問わず共通する課題を抽出する。また、当事者を対象にインタビューし、専門職がとらえる課題との相違点を明らかにする必要があると考える。

E. 結論

本研究では、障害者の受診時の困難について、支援経験のある専門職にインタビューを行い、現状と課題を明らかにした。医療機関受診においては、適切な配慮を必ずしも十分に受けていないことが明らかとなった。

F. 健康危険情報

特になし

G. 研究発表

1. 論文発表

該当なし

2. 学会発表

該当なし

H. 知的財産権の出願・取得状況

（予定を含む）

1. 特許取得

該当なし

2. 実用新案登録

該当なし

3. その他

該当なし